

南方（南洋諸島・他）

満州東寧から

西カロリン群島

ヤップ島防衛戦まで

福岡県 馬場 忠 俊

私の家は木製農機具製造の傍ら農業を営んでおり、家族は父母、姉二人と私、弟二人の七人家族で、姉二人は結婚してしましたから、私が兵隊に行く時は五人家族でした。私は子供の時脳膜炎にかかり、親が一生懸命に水で頭を冷やしてくれたので助かったそうです。生来身長が低かったので昭和十六（一九四一）年の兵隊検査では第二補充兵でした。

昭和十七年五月、教育召集により三カ月間久留米第五十一部隊（野砲）に入隊、第二中隊（楠中隊）に配属されました。現役兵が出発した後で古年兵は召集兵ばかりでした。戦友も佐賀市出身の糸山一等兵で内務教育にはあまり心配いりませんでした。八月下旬、日生台演習場で実弾射撃演習があり、大砲、弾薬車、予備品車の移動により各車毎に六頭の挽馬で引くのです。夜は民宿となり馬を筑後川の川原に繋ぎ、先輩と共に民家でくつろぎました。家主さんが鮎料理の数々をご馳走してくれ、久しぶりに畳の香りを懐かしんだことが今も思い出されます。私は砲手でしたので日生台までの往復を歩きましたが苦勞とは思いませんでした。

昭和十七年九月除隊しましたが、二カ月後の十一月十八日、再度赤紙召集令状が来ました。ちょうど稲の取り入れが終わり麦播きの準備中でした。第二人も家にいましたので留守中のことは心配ありませんでした。姉たちは嫁さんを貰えと強く言いましたが私はその気になれませんでした。

当時は軍隊教育を受けてはじめて一人前の男としての資格が出来るのだと言われていました。久留米第十一部隊に入隊する日には父、弟、姉婿達と共に、たまたま帰郷中の陸軍曹長石橋忠辛さんが来てくれました。石橋さんは父の仕事の関係で親交の深い家柄の人です。石橋曹長さんは私の上官と話をされたようですが、二日後には満州へ出征するようでした。

ひょっとすると石橋曹長の従兄の登さんの部隊かもしれんと教えてくれました。また軍隊の要領とは何でも一番になることだから頑張れと励ましてくれました。今回の内務班は補充兵だけで、満州から兵隊受領に来た池田軍曹から渡された冬の軍服や防寒具等に名札を付ける仕事で多忙でした。

入隊して二日目の夜、消灯ラップで眠りについいたら突然非常召集がかかり、点呼で全員いることを確認すると、班長が「召集兵が逃亡した。しかしすぐ逮捕された。皆もしっかり心得るように」との注意がありました。私の家の川向こうの町の人で家に帰って寝ていたそうです。

翌日午後四時頃の臨時列車で久留米駅を出発、家族皆揃って見送りに来てくれました。下関で乗船、途中船酔いもせず翌朝五時頃釜山港着、霜が雪のように白く降りていました。軍馬輸送用の貨車に乗せられ、床には馬の糞尿が敷かれ、馬糞の臭気と寿司詰めで呼吸が息苦しい旅でした。

満州国牡丹江省東寧駅下車、初めて踏む大陸の地、満州大平原を軍靴の音も高らかに大城子の満州第二二部隊（野砲兵第二十四連隊）に入隊したのが十一月二十五日でした。

満州編

第八中隊に配属され、内地での石橋忠辛曹長の子言

通り石橋登中尉の中隊でした。人事係の准尉さんから第四班編入と言われ当分は池田軍曹が班長となりました。班長に代わり初年兵の指導は二年兵の先任上等兵の佐野さんが詳細な説明や指導をしてくれます。佐野上等兵は体格頑健で塩辛声の人です。食事当番の心得、銃器の手入れ法、既舎の掃除が他班に遅れた等細かい指導をしてくれました。

消灯ランプが鳴ると菓布団の中に入りますが、消灯で廊下の灯りだけで薄暗くなると進級遅れの二等兵が二、三人小声で「初年兵、集合」と。初年兵は素早く食台横に整列、補充兵も一緒です。「貴様等タルンどる。足を踏んばれ」と一メートルぐらゐの精神棒で小突きながら二言三言言った途端、帯剣用の革ベルトが頬に空を切ってくる。革スリッパが顔へ……。翌朝は洗面は水で濡らすのみで、朝食は口が腫れて噛むことが出来ず、味噌汁で流し込むのです。

関東軍の私的制裁はさすがに凄いものでした。暫くして補充兵も砲手班、駈者班に分かれ私は砲手班です。分隊長以下八人で一個分隊です。東寧の街の後方

には地獄谷、極楽谷を挟み小高い山があるほかは平野で、開拓団の人が営農に励んでいます。兵隊はこの広野を縦横に駆け回り、実戦に備えて演習を続けるのでした。

初めて迎える満州の冬は零下三十度になり、防寒具をつけても骨の髄まで凍るようです。食事当番で食缶を返納するため洗うのですが、うっかり指先が缶に凍りつくと言先が剥がれるのでした。雪はほとんど降りません。たまに降る時もありますが風に飛ばされてしまいます。厳しい大自然の中を冬季大演習が実施されます。

地獄谷の山裾を通り第一日目は野営です。綏芬河の河原に幕舎を張り繫馬杭を打ち込む。カンカン鉄槌の音が冬空に響き渡りますが、土が凍って入らず、ツルハシで少し掘って埋め、後は水漬けで凍らせて鎖を張りめぐらし馬を繋ぎます。

水は凍った河に穴を開け藤つるで作った籠で汲み上げます。一回目は水が洩れますが、二回目からは凍って完全なバケツに早替わりです。幕舎に入り夕食です

が飯盒の飯は凍ってコチコチです。フォークでつついて口に放り込むのです。氷のかけらを食っているようでおかずは鉄火味噌でした。お茶だけは沸水車の湯を貰い温かいのが飲めました。寝る時は炭火を炬燵風に作りますが寒くて熟睡は出来ません。さりとて毛布を頭から被って寝ると一酸化中毒を起こす危険性があります。私も一度ありました。夜明けの寒さに耐え兼ねて毛布を頭から被って眠ってしまい、眼が覚めたのですが頭がボーとして何処にいるのか何をしているのか分かりません。幸い軽かったので正気に戻りました。頭を冷やすために河原に出て夜空を眺め、河の水を飯盒の蓋で飲もうと口に持っていったら唇が蓋に凍りついて剥がれました。

演習終了と同時に「鼻を揉め！」の号令で、防寒帽のスキ間から覗いて白く変色している鼻の頭が暫くマッサージすれば肌色にもどってきます。この寒さは体験した者でなければわかりません。

冬季演習が終わり河の氷も解ける頃になると満州の

平野にも春が訪れます。年も改まり昭和十八年になると三年兵の満期除隊です。正装した三年兵はさすがに嬉しさを隠し切れず、笑顔で「長い間お世話になったナ、お前たちも元気で頑張れよ。何かと辛い思いをさせたこともあったが、国の為だと思って許してくれ」と目礼をする。鬼の三年兵と嫌っていた人たちも、いざ別れるとなると寂しいものでした。

三年兵の除隊と入り替わり、初年兵が春と共に母国からやって来て、二年兵になった責任がひしひしと感ぜられ、私等が受けた私的制裁は絶対にしないと心に誓いました。

カロリン群島ヤップ島編

昭和十九年になると南方戦線の状況が噂になって、我が第二一二部隊も南方転出の話が出るようになってきました。ある夜、点呼後スピーカーから集合の命令が流れ、各自緊張の面持ちで内務班に集合しました。班長が静かな声で「かねてから噂のあった南方転出の命令が我が第三大隊に下った。只今から指名をする。

指名された者は準備をしておくように」班長の顔は緊張していました。三年兵が次々と読み上げる。私もその中に入っていました。

二月下旬、野砲兵第二十四連隊第三大隊は松尾大尉を長として満州国境警備の任を解かれて城子溝を後にしました。行先は西カロリン群島ヤップ島でした。

第十二師団から第四派遣隊（ヤップ島）が編成され、後に独混第四十九旅団となりました。

昭和十九年三月七日、釜山着、同日出港、八日門司出港、三月十五日台湾高雄入港、乗船の「はんぶるぐ丸」は故障のため出港出来ず、高雄に上陸して四月一日まで競馬場跡に宿営、訓練しながら待機しました。僚船二隻は三月十七日出港しましたが、途中米潜水艦の雷撃により二隻共沈没の悲運に遭いました。私等は運良く船の故障のため助かったのです。

四月一日、故障も直ったので「はんぶるぐ丸」はたった一隻で出港しました。途中雷撃を受けましたがそれを蛇行で回避しました。護衛はトロール船改造の駆潜艇一隻のみの心細さでした。

四月七日、「米機動部隊近し」の情報でミンダナオ島ダバオに退避のため入港しました。日本海軍の重巡ほか多数が停泊しているのを望見して喜びました。実は一週間前にパラオ、ヤップは米機動部隊の大空襲を受け、パラオの日本空軍は全滅、ヤップは守備隊未到着で無防備だったため全施設が焼土と化し、そのためダバオの日本艦隊はパラオから退避したものでした。私等の隊もダバオ港に投下された米軍機雷が除去されるまでダバオに足止めされました。

四月十七日やっと出港、途中ジグザグ航行で四月二十四日ヤップ島に到着しました。満州を出発以来五十六日を要したことになります。直ちに配備に就き、砲兵隊はマタデ山に大隊観測所を置き、私等第八中隊は東部方面のガギル島が担当となりました。

島民はカナカ族で男は木の繊維で作ったゴツゴツした下帯をつけただけで、女性は下半身にスカート風に腰みのをつけていただけです。いずれも上半身は裸です。なにやら口に入れて噛みながら兵隊たちに寄って

きて、真赤に染まった唇を綻ばせ、上手な日本語で「兵隊さん島を守りに来てくれてアリガトウ」と微笑みかけるといふ純情で誠実な人達でした。

ガギル島の一番高いところが八一メートルの丘陵で、この近くで飛行機の滑走路を建設中でした。島の海岸線には椰子の木が茂り、ドリアン、パン、マンゴー、バナナ、バイン、パイア等も自生して、鈴なりに完熟しているという実に夢のような所でした。島民の生活は原始的で火起こしは焼け木を擦り合って点火します。住居の屋根は椰子の葉で葺いてあります。

私の小隊は一〇センチ榴弾砲一門を持って、この島の滑走路の傍らに陣地を設営しました。川端准尉を長とする小隊は大砲なしで、水際作戦の斬込隊で一キロ離れたトミール地域に配置されました。私の小隊のいる地帯は赤く焦げた岩石地帯で、海岸は断崖になっているのでこの崖に洞窟構築を命ぜられ、小隊全員がツルハシ、エンピだけで洞窟壕を作るのです。

南の太陽は容赦なく照りつけます。兵舎はビンロウ椰子の柱や桁で、屋根は椰子の葉で葺き、縄は野生の

麻のようなもので作り釘一本なしで作りました。作業は梅田分隊長の指揮です。一日に一回は必ずスコールが来ます。この時に汗や埃を流しサッパリし、それが唯一の休息时间でした。

食糧は補給が全くなく、雑炊ですが米粒はあります。漁労班の獲る魚を唯一の頼りにしていました。住民のタロ芋、タビオカの採取は厳禁されておりました。

梅田分隊長があまりの心労と疲労と栄養失調のため本島の陸軍病院に入院してしまいました。代わりに小隊長が現場にくるようになり、作業が進まぬと罰として塩分禁止を命じられました。飛行場設営隊から爆薬を分けて貰い爆破作業が出来るようになり仕事もはかどりだしました。入院していた梅田分隊長が亡くなりました。良い人が亡くなられ、ご冥福を祈りました。

炊事勤務の板井上等兵が山芋掘りに出かけたまま帰らなくなりました。彼の採ってくる山芋は貴重な雑炊の材料です。心配していたら衛生兵が川端准尉さんが

呼んでいるからちょっと来てくれと伝えにきました。彼について真っ暗な闇夜を行く。島民が倒れている板井君を見つけて知らせてくれ、只今は歩兵の軍医が手当てをしているとの話でした。小さな洞の中に寝かされていました。川端小隊長が「何していたんだ、早く灯を照らして手伝え」と言いました。時限爆弾で股間を吹き飛ばされており、呻き声で私の名前を呼んでいたそうです。板井君は郷里が同じ福岡県瀬高町でしたので馴染み深い戦友です。早速、野戦病院に担ぎ込まれて懸命の手当てを受けたのですが、その甲斐なく二日後に絶命しました。

梅田伍長の病死、板井上等兵の戦死と訃報が続くので中隊長が巡視に來られ種々指示をされました。壕に覆いをつけるようにとの指示で、設営隊からトロッコ線のレールを貰い、それを天井梁にして椰子の葉を被せ、土を載せて壕は出来上がりました。板井君の死後依然として雑炊は米粒のない葉汁が続き、時々漁労班からの亀の肉やエイの肉が唯一の栄養源です。

私の小隊長は陸士出の少尉で張り切っていて、他の

小隊に負けるのを嫌い、兵隊に厳しい将校で、陣地構築を買って出たくらいですから、他隊では食糧確保に農耕班を編成して芋の苗植えをすましていた頃に、我が小隊はツルハシを振るっていました。そのため、我が小隊の自活作業は他隊より三カ月も遅れていたのです。

ある時、島民の青年が「煙草の葉をください」と来ました。皆に尋ねたら喫煙者もないから分けてやれとの事で葉を十二枚やりました。この煙草の葉は今亡き梅田伍長が中隊の自活班から貰った苗を近くの竹藪を開墾して植えたものが成長していたのでした。その日の夕方青年が籠に大小の生きた魚を入れてお礼に持ってきました。久しぶりのご馳走でした。青年は終戦まで五日毎に何か土産を持って訪れるようになったのです。

掩体壕の完成間近の頃、三年兵から馬場兵長は骨に皮を着せたようだ、少し休んだらどうかと言われたことがありました。気力が充実していたためか気にしま

せんでしたが、そのうち突然目に映るものがすべて鮮やかに見えるのです。不思議だなあと思っていた時に炊事の坂口兵長が「トールミル陣地の赤坂兵長がお前に食べるようにと米を届けてくれたのだ。早く食べる」と飯盒に米の重湯を持ってきてくれました。日本米のおカユ、おいしかったですね。戦友の皆さんの好意が神様、仏様のようで有り難かったです。感謝しました。私は死の一步手前だったのかもしれない。

このことは川端小隊長が部下の赤坂兵長に「ガギル島で第三の犠牲者が出かかっている、何とかしてやれ」との親心に、彼は炊事班に行き、自分の食事を米でくれと説得して靴下に一台の米を入れて持ち帰り、坂口兵長に届けた米だと判りました。

自活作業も順調に進み雑炊の中身も少しは豊富になり兵隊も少しずつ元気になってきました。米は米軍上陸戦に備え依然として支給はありませんでした。ある日突然観測班から「敵艦が見える」とのことで、台上に登ると珊瑚礁の近くに駆逐艦二隻、駆潜艇二隻が横に並んでいます。小隊長は早速「陣地砲列用意」を命

じます。兵隊も元気が回復した直後で皆張り切っています。小隊長は発射準備を命令、梅田さんの後任伊藤伍長は私と同年の下士候でウロウロするばかり。私は二番砲手で張り切りました。照準器で覗くと四隻の大砲全門がこちらを向いて今にも発射寸前、甲板上には水兵が並んで眺めている。挑発しているのです。

小隊長は早く撃てと焦る。その時、衛生兵の野田兵長が駆け上ってきて二番砲手の私に「馬場兵長、いま撃ったら島は全滅する、撃つのはやめろ、准尉さんの使いで来たのだ」。それまで躊躇していた私は、伊藤伍長に「弾が届きません」と報告していたら、中隊長の命令で「射撃は中止。即時撤退せよ」の無線が入りました。夕方には敵艦の姿はありませんでした。

昭和二十年十二月十八日、海防船でヤップ港出発、昭和二十年十二月二十六日、浦賀港到着、二十九日、九州方面行き列車で復員、三十一日、門司着解散、昭和二十一年一月一日、懐かしの自宅に帰る。家族全員無事でした。

部隊史によると米軍はヤップ島上陸を計画したが陣地構築、水中障害物等の構築速度の速さからヤップ島守備隊の戦力を過大評価し、上陸作戦を取り止め、レイテ島上陸作戦に変更する一因となったそうである。守備兵力は陸軍四、四二三人、海軍一、四九四人、合計五、九一七人、戦死者三四四人となっています。

満州・トラック島の戦務

福島県 荒 明 文 衛

昭和十六（一九四一）年衛生兵として検査を受け、甲種合格でした。当時、生家は、福島県河沼郡東松山村で、私は農家の十一弟妹の長男として、大正十（一九二一）年六月三十日に生まれ、家業を継いでおりました。

大東亜戦争が開戦となった四日後の昭和十六年十二月十三日、広島へ集合、即入営となったのです。ですから、十六年徴集兵としては最も早い入営です。とに

かく、真珠湾攻撃で日本国中が歓声を上げている時で、どこの駅でも「万歳！ 万歳！」で送られたのです。入隊は朝鮮羅南の第十九師団歩兵第六連隊ということ、私達は引率者に連れられての出発でした。

十二月十二日、二等兵、現役兵として歩兵第九十六連隊補充隊第一機関銃中隊入営。

同月十六日宇品港出港、十八日釜山上陸（幸いにも海は荒れず平穏な航海）、二十日釜山より鉄道にて羅南着、二十二日羅南出発、鉄道にて洪儀着。

下車しましたが北朝鮮の十二月末ゆえ、会津に比べ大変寒さが厳しいものでした。兵舎に入りましたが山の向こうが凶満江であり、朝鮮・満州・ソ連の境であり張鼓峰のそばでした。兵舎は曾山の反対斜面の土を削り掘り、木造の建物でした。屋根には土を覆せ、外からは判らないようにしてありました。

ここで教育を受け、一期の検閲を済ませました。隊員は福島県の人が多く、後には四国の人も入ってきました。羅南には二個連隊あり、うち一個連隊は補充隊で、私は補充隊でした。